



地域住民の主導で古写真を記録

2月に流川公民館で開催された「ふるさと今昔写真展」は、米岡睦雄区長(当時)ら地域住民が主導して地区の写真約300枚を展示。各家庭が保管していた明治時代から現代までの写真が並びました。

いわゆる絶景写真は皆無で、日常を記録した「普通の写真」ばかり。しかし、親や知人の若い時代の写真を見つけて喜ぶ人や、戦後すぐ顔を知らないまま亡くした母親の写真を見つけて涙する人の姿も。各家庭に眠っていた写真は思わぬ発見と感動をもたらしました。



実行委員
森 龍之さん
(流川)

資金面の問題は助成金を活用

宝くじ事業の助成金を申請し、開催にこぎつけました。住民の郷土愛が深まり、結束も強くなりました。他の地区でもこのような写真展を企画してほしいです。



流川銀杏会(老人会)
原田俊子さん
(流川)

「普通の写真」が持つ力を実感

老人会メンバーで地道に写真を集めました。地域の人は大喜びで何度も足を運び、地区外からも約200人が来場。写真が持つ力を思い知りました。



上_戦時中(昭和15年頃)に旧清泉小学校で執り行われた出征兵士の村葬。校舎前に写るモクセイの木は七城温泉ドームのシンボルとなっている 下_昭和61年2月15日、広瀬駅に停車する菊池電車の最終列車。この日を最後に御代志から菊池までの区間が廃線になった

聞き取り調査が価値を高める

「写真や資料に背景やエピソードなどの情報が加わると、資料的価値が高まります」と坂本さん。資料所持者の高齢化が進み、関係者が健在なうちに聞き取りが必要と訴えます。調査時は地域の高齢者一人一人を訪問し、情報を集めました。「人の証言は、どんな情報にも代えがたい生きた情報です。戦争の語り部が高齢化とともに減っていることが問題になって



郷土資料収集家
坂本 博さん(高野瀬)

いますが、記録の聞き取りも同じ。その資料を知る人から直接話を聞くにも、時間が限られているのです。情報化社会が発達した今、調査できれば半永久的に記録は残ります。地域の歴史を残すには、今が勝負なんです」



記憶を記録する

ありふれた日常を写した古写真。地域の歴史や伝承を綴った資料。人や街の日常を記録した郷土の大切な宝物が今、次々と失われつつあります。まちの宝物を守るために活動する人を紹介します。

【問い合わせ先】菊池市中央図書館
☎0968(25)1111

地域の記録が消失の危機

浴衣姿の男性たちが写った1枚の白黒写真。大正末期から昭和初期に撮影されたもので、一見すると普通の集合写真です。「写真が持つ背景を調べると、ただの写真に見えても実は重要な意味を持つことがある」と説明するのは、以前から地域に眠

る古写真を集め続ける坂本博さん(高野瀬)。写真を基にまちの歴史をひもとく活動をしています。「背後の建物は、かつて菊池に存在した芝居小屋の桜座。建造時の写真がほぼ残っていないので、とても貴重です。また、写真をよく見ると2台の車が並びます。自転車ですら高級品で庶民は手が出なかった時代。当時の菊池の繁栄ぶりも読み取れます」

ところが、こうした貴重な情報を持つ写真や資料が、その価値に気づかれないまま失われるケースが増えています。

持ち主の高齢化に加え、家の建て替えや引っ越し、家主の代替わりによる荷物整理。さらには終活や断捨離で捨てられたり行方不明になったりしてしまうケースが多く発生しています。「まちの記憶の財産が、永遠に目の見えないまま失われている。今残さないと郷土の歴史が失われ、取り返しがつかなくなるのです。後世に記録を残す重要性を、市民に理解してもらいたい」と坂本さんは警鐘を鳴らします。

市民と作るまちの資料館

市が取り組んでいるデジタルアーカイブ事業。各家庭や地域で保管されている写真や資料をデータ上でまとめ、記録することで、半永久的に保存し、共有しようとするものです。



写真以外の記録も充実
今後もデータは増加予定

「保存が前提とされる文化財に比べ、市民の日常記録は常に廃棄されてしまう可能性をはらんでいる」。そう話すのは、中央図書館で郷土情報係を務める鷺崎有紀さん。市が持つ資料や市民から寄せられた写真などをデジタル化しています。

資料の受け入れも実施

デジタルアーカイブ事業は、生涯学習センターの開館に伴い、中央図書館が引き継ぎました。写真のほか、合併前の4市町村が発行した広報紙や古文書などを登録。データは随時増やしていく計画で、今年4月に写真の

お持ちの資料は、まちの宝物かもしれません。まずは気軽に相談ください。お預かりした資料は大切に扱います」と呼びかけます。



右_取り込んだ画像はパソコンで管理 左_提供された写真は1枚1枚丁寧にスキャン。データ化したあとは提供者のもとに返却



「KIKUCHI DIGITAL ARCHIVES」ホームページ
<https://da.library-kikuchi.jp/>

提供者の声

市のデジタルアーカイブ事業に資料を提供した人たちの声を聞いてみました。



緒方寛子さん(林原)

先祖が残した大切な写真

父と祖父は、旧清泉村(現菊池市七城町)の村長でした。当時の村の記録写真が家に多く残っていたので、何かの役に立つならと思い提供しました。昔の風習や戦時中の様子などを現代の人たちに知ってもらいたいです。



清泉村(当時)の消防団
(昭和12年撮影)



佐々木草さん(広瀬)

生活を共にした菊池電車を記録

自宅は廃線になった菊池電車の広瀬駅近く。撮りためた写真は地域のお祭りで展示していますが、電車だけではなく、背景の古い街並みを見て喜ぶ人も多いです。今は電車を知らない世代も多くなりました。菊池の交通を支えた雄姿を見てもらいたいですね。



広瀬駅(昭和61年撮影)

市民の意識で歴史を守る

インターネットや各種メディアが発達し、記録媒体もデジタル化された現代。記録の保存を強く意識しなくても、自ずと後世に情報は残ることでしょう。しかし、以前のアナログ時代の記録は意識的に残さない限り、いずれ消失の危機を迎えてしまいます。明治や大正時代はもちろん、昭和や平成初期の記録ですら消えかけているものがあります。

断捨離や終活の言葉に見られるように、身軽なスタイルがもてはやされる現代。「物をとっておくことが良い時代ではなく、なくなった」と話した鷺崎さんの言葉は、消失の危機が迫る資料の現状を現しています。記憶を記録する。市民一人一人が過去の記録を後世に残す意識を持つことで、菊池の歴史が失われずに済むかもしれません。

かつて福本にあった製紙工場「泗水社」のれんが煙突



4 車道と並走する菊池電車



1 限府温泉の仮設浴場



3 竜踊り



2 緒方商店



5 東正観寺の丁子屋前



8 中央通り商店街



7 合志川



6 吉岡・徳永両旅館



10 鞍岳を望む牛舎



9 寿屋百貨店

1_ベンチには金子呉服店、佐々洋服店などの屋号が見える(昭和29年) 2_現在の七城温泉ドームの向かいにあった緒方商店(昭和32年) 3_雌雄2匹の竜が舞い踊る菊池の代表的な郷土芸能の一つ(昭和40年頃) 4_広瀬にあった岩下酒店の看板が確認できる(昭和60年頃) 5_清酒菊英、安武豊店、松岡時計店、金子呉服店、中原菓子店の看板が見える 6_七城の高島橋にあった吉岡・徳永両旅館(明治33年) 7_田島付近から上流を見た合志川(昭和22年) 8_かつては歩道にアーケードがあった中央通り(昭和50年頃) 9_現在の米田産婦人科(切明)の斜め向かいに寿屋がオープン(昭和49年) 10_「広報きよくし」昭和52年1月1日号の表紙